

「子どもの力」——について の迷信

周 郷 博

「子どもの力」という標題で短い文章を書くことを求められた。まったく無神経、粗雑な注文をしてきたものだと思われ、気が持たなかったが、思い直してみると、あの「学力」という——それがないとこの世間から「落ちこぼれ」と見做されて弾き出されてしまう「恐怖」にかられて、どこの親たちも早く「身につけさせて」やりたいと「思っ」て、いる「競争力」や「学力」への執心——そういう底流があって、こんな奇怪な発想がでてきたのだらうと得心した。

十二、三歳までの子どもの世界——とくに未だ幼い子どもたちは、ほんらい未だそういう喰うか喰われるかといった「おとなたち」の情容赦のない競争角逐——駆引きの世界に住んでいるはずではなかった。そういう焦立った狭い我執我

欲、自分たちの目の得しか目にみえず、味わいも、人生の深い意味も感ずる暇もない世界へ無理無謀に子どもたちを引きずり込んで、「人生というものを暗くし「生きがい」の火を消し去った「報い」が、このごろ特に異常に多発している子どもの自殺や犯罪、家庭内の怖しい暴力、殺傷事件を招いているのである。神谷美恵子さんの『生きがいについて』の「序のことば」に「人間がいきいきと生きて行くために、生きがいほど必要なものはない……それゆえに人間から生きがいをうばうほど残酷なことはない、人に生きがいをあたえるほど大きな愛はない」という一節を読んだとき、私は幼稚園や学校がこうした感覚、価値観を少しでも持ちあわせているなら、子どもはいまとは全く違ってくるだろうと思った。ところが、学校や幼稚園は、口ではなんと理に合ったことばをならべても、変形して「迷信」に近い、すでに異常なあの「競争」に加担して、「共犯者」といっていい恰好になっているのである。「人生」というものも「人間——人間というものは、子ども」にその本体が宿っているはずだが」というものも、そんな「ちっぽけな」「ひねた」「おとなび」で畏縮した」ものではなくて、もっと大きな、視野のひらけたものなのに、子どもたちは、そうした「人生」や「人間」を感得し励まされる機会をほとんどもつことがなく「奪い去られ」

て、生れてきて間もない四つ五つの年齢で、もう、いちじるしい早期老化現象が影をひいている。有吉佐和子さんが聖人のように敬慕している奈良の医師梁瀬義亮さんは、いまの化学肥料や農薬、温室でそだてられた野菜は、「野菜の顔をしてはいる」が、あれは「野菜（自然の恵み）ではなくて、工業製品だ」といつているが、いまの子どもたちは、気の毒に生れてきたと思つたら、もう、早目にさういう「人間の顔をした」工業製品」と見られているのか。画一化されて、きちんと並べられたスーパーのナスやキュウリのように——。大不幸＝惨害 (Disaster) が降つて湧いてくるのは目に見えている。

そんな狭いひねた「子どもの力」についての迷信の気味わるさを考えてみているうちに、私は、古いといわれても未だ素朴だった、私の七つ、八つの子どものころの情景を思い出した。

そのころの私が育つた山里の村は、まだ電灯が入らずに、ランプの生活だった。ランプの灯りで、何やら「長い一日の終り」の夜というものが家々に点つた。ランプの火屋（かや）につい

た煤すすを手にボロ布をもつてきれいに掃除するのは、夕方の子どもの「しごと」だった。よごれた火屋に手を突っこんでクルクル掃除するには、子どもの手と手首はちょうどよい大きさで、おとなが棒の先に布を巻きつけて（おとなの手は大きくて入らない）掃除するぶきつちょうさより、ずっとまじだつた。そのころは、いまはもうそのことばがまるで実感を失くしたが、まさに「夜の帳（とまり）が降り」て、野も川も林も家々も「陽が落ちたあとの暗闇」に一面につつまれて、一日の（平安な終りがきた。風の音が暗くなった森にざわざわと吹きつのは）のついたり、雨が降りだしたりしたそんな夜は、うす暗い灯りだが、ポツリポツリと家々に点される灯りが夕餉のかおりとともに、子ども心にも「家こいしさ」をさそつた。——そんな素朴なランプの灯りの下で、「しごうを踏む」とか「仕切りなおし」をする……そんな大げさな仕事をやっては、父親と相撲をとつた。たまたま勝つたりすると、「（双葉山のような？）セキトリになれるゾ」なんて家族そろつてそんなことと興じて短い夕べのひとつきをすごした。七つ、八つのころ、ただ単純に「子どものからだができていく——力がついていく」ことを「よろこんだ」そんな昔が、懐しく思ひだされたのだ。

そんな七つ、八つより少しまへ——四つ、五つのころか——

これはかなりハッキリと記憶されているのだが、道を距てた前隣の床屋のオバアちゃんと母と、そこへ小さな私がちょんといっしょに、冬の炬燵にはいついて、私はこの二人が声をたてて読んでいる講談本の「塩原多助」の「愛馬の青馬」との別れを惜しんで故郷を出るくたりに読むのをただぼんやり「つき合って」いるふうに聞いていて、とつぜん声をあげ涙をほろほろ落して泣いた。いまもその実感がかすかに残っているけれど、そのとき床屋のオバアちゃんが「感じ入った」ように、どんなことばで二人がいったのかは忘れたが「カンシンな子だよ」と、「いい見つけもの」でもしたように話していたあの少時を思いだす。そんな、子どもの内部分から「花開く」ようにして「育って」くる「情緒（感じる心）」も、子どもの力―内発的な力というものの中にいれられるだろう。

そういう年齢よりも少し前、三つ、四つのころのことだが、これは自分ではもうまるっきり「憶え」がないのだが、昔は家の前に「掘り抜き」井戸があつて、水がボゴボゴと湧いて、井戸枠の切り口からいつもちょろちょろと流れだしていた――小さな私は、バケツを手にして井戸の中の水を汲んだはいいが、バケツいっぱいに入った「水の重さ」に引き込まれて、逆さに井戸の中へのめりこんでしまったらしく、小

さな足の先を井戸の枠に「のぞかせ」たかっこうで頭からすっぽり井戸の中へ落ちてすっきり「水をのんで」いたらしい。そこへ、昔はよくどこにもいた「バカ」――いつもニコニコ笑つて、婚期も逸した女がいたものだが、その人が通りかかつて、井戸枠にちょんこんと足の先をのぞかけて死にかけていた私を救い出してくれたらしい。昔は、子どもが、ちょっとした病気や事故などでよく死んだものだったが、子どものそうした生命の「脆さ（無常）」というものが背景にあつて「生きていく」ために「恵まれる（発現してくる）」その子どもを、人は賞で、よろこびにしたと思われる。その三歳にまだ達しない一九一〇年に、あのハレー慧星があらわれて、太陽がそのハレー慧星の尾の中へはいると、昼間なのに、周りが暗くなつて「空に星がゾロツと出て」やがて、夕焼の空へ尾を引いて沈んでいったという話を、私は母からよく聞いて、その情景が心にはっきりと焼きついてゐる――が、前の、井戸に落ちて殆んど死にかけた経験といっしょに、あとになつて「母から聞いた」話と「一つに交り合つて」、それが恰かも「自分がほんとうに経験し」「見た」ことのように、「記憶」にとめられ（蓄積され）てゐる。こうしたことから考えてみると、三歳前後までの子どもの経験や「見聞きしたもの」（幼いながらの自然を見る目や社会を見る目）は、次

第にそのからだと心に拠って発現してくる「からだ、と心の力」「感受性」「もの見かた」の成熟といったものを含めて、このごろの流行語でいえば、子どもたちひとりひとりのアイデンティティーというものは、周りの——母の（或いはそれにとって代る役割をしている者）の「ことば」や「話」語りをそこから外してしまったのでは成り立たない、ということができると思う。——この点で、いまの幼い子ども——三歳前後までの子どもの育ち（教育）は、たいへんに大きな過ちを犯していることに気がつくはずであり、その年齢までの幼い子どもの心をマリヤ・モンテッソーリが「アプソールベント・マインド（吸収する心）」と呼んだ卓見にいまさらのように敬服させられる。周りの環境、道具や棲みかた、子どもをとり巻くその人たちの行動、眼差し、語り（心のはたらかき）と一つに「融け合った」かたちで、子どもは最初に自己のアイデンティティーを自分自らつくりあげていくのである。歌わない、語らない——「物語り」をしない母が多くなつており、「食わせて」「着せて」「勉強させて」せかせかと幼稚園などに出入りしていればいいというのか。子どもの力（ポテンシャル＝潜在力）は、すでにこの三歳前後にその骨格が出来あがるわけだが、そこがすでに大へんに「頼りない」「不安定」な状態のまま経過していくのである。その

あとに「ひかえている」幼稚園、学校、これは社会、生活、家庭とともに、子どもたちの内発的知的な創造性が伸長していくのには、どれもこれも「時代遅れ」というか、「がらくたな機械仕かけ」というか、ほんとうにお粗末をきわめた制度という「化けもの」に近いのだ。それで「古いといわれても」素朴だった昔の——「見つけもの」のように子どもが「あらわしてくる」力、「無理をしない」内発的な力を賞でそれを「よろこんだ」昔が、私には懐しく思ひだされたのである。

三歳ごろに「もうけもの」のように子ども自身の内部に生れてくる、あのすばらしい「秩序の感覚」(Sense of Order)、「正直とか、美しいもの醜いものを見分ける感覚」、「隣人の愛」のようなものまでが——そうしてどの子ども「人間になる」ための「学習」(何がやれるようになること)が好きなのであり、おとなとちがつて、ジャン・シャトーがいったように「子ども——それは自己を超えて生きる」つまり「未完成な自己を完成して」おとなたちが死んだあとに人類を完成しようとして「生きている」唯一の——かけがえのない存在なのである。健康な野菜と同じように、これも「時」というものにかたつていなければならない。「天の下のすべてのことには季節があり、すべてのわざには時がある」(伝道の書三・一)